学内発表会要旨

平家物語における「あはれ」と「むさん」について

田中高志

はじめに

平家物語については、「仏教的無常感」を述べたものであるとか、「平家の哀調というのはこの作の驚くべき純粋さからくるのであって仏教思想というようなものからくるのではない。」とか、その他、いろいろ言われている。だが、わたくしは、平家物語を「悲劇の文学」とも「あはれの文学」とも呼びたいと思う。栄えていた平氏の滅亡。これは悲劇である。源氏と平氏という二つの大きな渦の消長のさなかに、泡のごとく浮かびあがっては消えていった幾多の人間群。これもまた悲劇といえよう。

「あはれ」という言葉は、平家物語の中で、重要な位置を占めている。そして、この言葉は、ふつうは、悲哀感や無常感を表わすと考えられている。しかし、平家物語に使われている「あはれ」ははたして、すべてがそうと考えられるだろうか。

すべてを押し流す大きな運命の流れの中で、なお生きんと烈しく生命力を燃焼させている人間の姿、そういうものにじっと目を注ぎながら、人の世の無常を単なる感傷や悲哀としてでなく、もっと高次の段階でとらえている、いわば「悲劇智」の「あはれ」とでもいうようなものがあるのではないか。

このように考えると「あはれ」という言葉を詳しく調べることによって、ある程度、平家物語の本質に迫ることができるのではないかと思われる。

以上のような考え方から「あはれ」の表現について調べ、次のように分類してみた。

一、「あはれ」について

1　章別による分類

章別に分類してみると、「祇王」「鹿ケ谷」「都落」「敦盛最期」「海道下」「維盛出家」「六代」などに「あはれ」が多く用いられていることに気がつく。

しかも、これらの章段は叙事的手法というよりも、和歌、朗詠、詩賦などをふまえた韻文調の表現、つまり抒情的手法が用いられている。「海道下」などは全文ほとんどこの手法でつらぬかれ、道行文になるまで発達したものといえよう。こういった七五調の韻文的表現は原平家の叙事的表現とは異なるものであり、後人が、かなり手を加えたものとされている。別の作者が新しく章を設けたのだという説のでるわけもここにあるのかもしれない。

佐々木八郎氏は『平家物語の研究上』において、「従って『平家物語』に多くみられる七五調の韻文的表現の発生の動機は、決して琵琶に合はせて語るがために七五調の韻律を

もたせた所に主因があるのではなく、ある場所、ある場合の深き情感を表出するために和歌の句を踏まへたのが、ただにその句を引用するばかりではなく、その和歌的な韻律をも攝取移入することが更に効果的であることを悟って、韻律化を試みるやうになったためであると推察される。」（275ページ）と述べておられる。

平家物語における「あはれ」が、このように、抒情的表現のなされている章に多く用いられているというのは、非常に興味あることに思われる。

これらの章の文章を読み、佐々木氏のご意見などをもとに考えてみると、原平家に手を加えた人物というのは、中世的というよりは、平安朝的感受性の持主であったといえるのではないだろうか。このように、平安朝的文表現を好む人物がより多くの「あはれ」を使っているということは、「あはれ」という言葉が平安朝的抒情的なものであるということであって、わたくしが最初に述べた「悲劇智」という「あわれ」とはかなり異なっているように思われる。

では、この事実からどういうことが言えるだろうか。これらの「あはれ」は抒情的に用いられており、しかも、これらの章に用いられている数が多く、七五調の韻文的表現とあいまって、感傷、あるいは悲哀感といった抒情的世界をうたいあげている。かなり飛躍した考え方ではあるが、これは、これらの各章が後人の手になったという考証の一つの材料を提供したことになるのではないかと思う。

章別分類により考えられることは以上であるが、次に、場面による分類をしてみよう。

2　場面による分類

場面に分けることは、章別に分けるのとは異なり、非常にむずかしいものがある。はっきりした、客観的なきめ手がないだけに、どうしてもあいまいにならざるをえない。「死」の場面に使われているからといって、かならずしも死そのものを「あはれ」といっているのではない時もあるということを考慮しておくべきだろう。

このように、かなりあいまいなところがあるにしても、いちおう次のように言えるのではないか。平家物語の「あはれ」は、流寓、望郷、懐古などの内容をもった零落の場面とか、あるいはまた、後世を弔うとか出家などの内容をもった、信仰の世界とか、あるいはまた、別離、死などの場面に多く、明るい希望に満ち溢れた場面とか向上的な場面には使われていない。

これは、誰もが予想する分りきったことのようだが、それをはっきりと再確認したことは、わたくしにとって一つの収穫であったと思われる。

では、そのような場面に現われた「あはれ」は、どういう心情から発した言葉なのだろうか。そこで、次の分類をしてみよう。

3　主体の心情による分類

これは場面による分類以上に分類することは非常にむつかしく。かなりあいまいであることは否定できない。しかし、いちおう、同情、憐愍、悲哀、感慨などの「あはれ」が多いといえる。また、そういったものとは別に、嘆息の「あはれ」が多いことも注目すべきだろう。ところで、ここでいちばん注目すべきことは、わたくしが「自覚」の「あはれ」としているものである。

熊谷あまりにいとおしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、めもくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣々頸をぞかいて（ン）げる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜

かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかゝるうき目をばみるべき。なさけなうもうちたてまつる物かな」とかきくどき、袖をかほにおしあてさめ〴〵とぞ泣ゐたる。（下巻、巻第九　敦盛最期　221ページ）

「あはれ、よき大将軍に組まばや」といって戦場を駆けめぐる熊谷次郎直実が、これこそよき大将軍と思って捕えたのが敦盛である。ところが彼は敦盛を討つことができない、それには、たんに相手が武器を捨てた若武者だからというだけではなく、もっと深いものがあったのではないかと思う。それまでに幾度も合戦の場を踏み、多くの人を殺し、傷つけてきたであろう直実が敦盛を討つにしのびなかったのは、ただそれだけの理由でなく、彼の心に突然めざめた深い人間性によるものではないか。

源氏と平氏の戦いとはいえ、なぜ人間が人間を殺し合わなければならないのか。いったい、人間が人間を殺すなどということが許されるのか。敦盛を組み敷いたまま逡巡する直実も、けっきょく、敦盛を討ってしまう。

彼が「あはれ……」と言っているのは、たんなる嘆息ではなく、人間の真情を吐露した悲痛な心からの叫びではなかったろうか。熊谷の叫びは作者の叫びであり、熊谷の慟哭は作者の慟哭でもあったのではないか。熊谷の強い人間性すらも、大きな力の前では何の役にも立たない。平家物語の作者は、そういった、人間性が大きな時の流れの前に押しつぶされる悲劇を「あはれ」という言葉で表現しているのであって、これはもう、悲哀でもなんでもない。

わたくしは、章別分類や、場面による分類のところで、平安朝的抒情的な「あはれ」が多いといった。ところがこの例のように、非常に数は少ないのだが、わたくしのいう「悲劇智」の「あはれ」にちかい用例もある。こういう「あはれ」は数こそ少ないけれども、非常に中世的なものであるという点で注目すべきものと思われる。

ところで、平家物語の中には、このほか、悲劇的場面を表現したものとして、「むざん」という言葉がある。

「あはれ」について述べるからには、それと関連のある「あっぱれ」について触れておくべきなのだが、長くなるのでここでは省略して、次に「むざん」について述べよう。

二　「むざん」について

「あなむざんの盛長や、さしも不便にし給ひしに、一所でいかにもならずして、思いもかけぬ尼公の共したるにくさよ」

（下巻、巻第九　重衡生捕219ページ）

この例のように、「むざん」という言葉は、もともと「恥知らず」という意味をもっていた。そういうことから、「恥知らずまでも生を充足しようとする」気持ちを表現する言葉となり、やがては、そういう生の充足のおもいきりの活動が外的な力で断ち切られた時に使われるようになった。

「あ（ッ）ばれ、……（中略）……通口めせ」とてめされけり。通口次郎たゞ一目みて、「あなむざんや、斎藤別当で候けり。」

（下巻、巻第七、実盛80ページ）

このような例は多く、いずれも「残酷な」とか「いたましい」などの意味になる。実盛などの例のように、彼等のただ一つの生きる道は、みごとに戦い、みごとに死ぬことにあった。なるほど外面的には運命という大きな力の前に押しつぶされ、破れ去ったといえるだろう。しかし、破れ去ったとはいえ彼等はただ一つの生きる道を選び、烈しく生命力を燃焼しつくしている。そういう意欲的人間が運命の前に破れる姿は、悲壮であり、悲劇的

なもので、平家物語の作者は、そういう場合の苛烈さを「むざんなれ」といったのではないかと思われる。したがって、より中世的実感の言葉として注目すべきだと思われる。

三　おわりに

以上、「あはれ」と「むざん」について述べてきた。その結果「あはれ」は滅びの哀感をうたいあげた、悲哀感を表現した用法が多いことを再確認した。

と同時に、また、非常に数は少ないけれども、「敦盛最期」のところで説明したような「あはれ」も指摘された。すでに述べてきたことだけれども、これはたんなる感傷、悲哀感としての「あはれ」ではなく、人間の悲劇を見通した「自照的」な、あるいは「悲劇智」の「あはれ」といってもいいもので、これこそ中世的なものであると思われる。そして、案外、こういう「あはれ」とか「むざん」などの言葉にこそ、平家物語の本質があるのではないかとも思うのである。

小林秀雄氏も述べておられるように、われわれは、躍動する板東武者の烈しいエネルギーに驚異の目を見はる。平家物語の作者が、悍馬のいななき、武士の汗、ダイナミックな合戦の様を、かくもリアルに描いているのはなぜだろう。

源氏の勃興の様がかなり克明に記されているのは、たんに、主役たる平氏一門の没落の様をより鮮明にする効果だけに終わっているのだろうか。わたくしは、それだけとは思わない。平家物語の作者は、たんに滅びを美化しているだけでなく、新しく勃興してくるエネルギー、あるいはまた、どのような場におかれても、烈しく生命力を燃焼させる人間の悲壮さ、それゆえに美しい姿にじっと目を注いでいるのではないだろうか、と思う。

このように考えてくると、わたくしの平家物語に対する興味はますますつきぬものがある。ここでは「あはれ」と「むざん」についてしか述べられなかったけれども、今後は、たんに一語をとらえるのではなく、全体的な構成とか、表現とかの面から平家物語をながめてみたいと思う。

①章別による分類（テキストは岩波の『日本古典文学大系』）

（凡例）使われている数／ページ数。（　）のあるのは感嘆詞／場面による分類／主体の心情による分類

（巻第一）

祇王	4	101	1イ	103	2イ	(104)	2ト		
		107	2イ						
二代后	2	110	3ハ	111	3ル				
願立	2	(129)	1ヘ	131	3イ				

（巻第二）

座主流	2	143	2イ	144	1イ				
一行阿闍梨之沙汰	1	149	2ロ						
西光被斬	1	(153)	1ト						
小教訓	3	(156)	1ト	159	1イ	163	1イ		
小将乞請	2	(166)	1ツ	(167)	1チ				
教訓状	1	(171)	3ツ						
大納言流罪	3	179	1イ	180	1イ	182	1ハ		
阿可屋之松	2	(183)	4ホ	(185)	1ヌ				
大納言死去	2	187	4ロ	190	2イ				

徳大寺之沙汰 1 (193) 1ル
康頼祝言 1 199 2ロ
卒都婆流 1 205 1ロ
辭　武 2 205 1ロ 206 1ハ
(巻第三)
小将都帰 3 229 3ロ 230 4ハ 230 4ハ
僧都死去 2 (237) 3イ 239 2イ
医師問答 1 244 5イ
無　文 1 (247) 3ル
法印問答 3 252 3ロ 253 3ロ 253 3イ
法皇被流 1 (262) 1イ
城南之離宮 2 (266) 2ル 267 1ハ
(巻第四)
厳島御幸 6 270 1イ 270 1イ 270 1イ
(271) 1ヲ 273 1ハ 273 1ハ
永僉議 1 304 6ロ
大衆揃 2 307 2ヌ 308 4ハ
宮御最期 1 316 5ハ
(巻第五)
都　遷 1 335 1ル
月　身 1 339 1ニ
早　馬 1 (345) 1ヌ
成陽宮 2 348 6ロ 349 6ロ
文覚荒行 1 355 2ロ
富士川 2 368 7ヌ 372 7イ
(巻第六)
葵　前 1 392 3イ
小　督 1 397 3ハ
入道死去 2 408 5ロ 410 5チ
祇園女御 1 422 1ハ
(巻第七)(以下、下巻)
実　盛 1 80 5イ
平家山門運暑 3 92 2ロ 92 2ロ 92 2ロ
維盛都落 1 98 4ホ
聖主臨幸 1 101 6ハ
忠度都落 3 103 4イ 104 4ニ 104 1イ
経正都落 3 105 4イ 105 4イ 107
和歌一門都落 1 112 1イ
福原落 2 116 1ハ 116 1ハ
(巻第八)
緒　環 1 129 1ニ
(巻第九)
生ずきの沙汰 1 165 1イ
河原合戦 1 167 1イ
敦盛最期 4 (219) 7チ (220) 7チ (221) 5チ
(222) 2チ
小宰相身投 3 (229) 3ヌ (231) 7ハ 233 3ホ
(巻第十)
首　渡 2 238 1ロ 240 3イ
内裏女房 2 247 4イ 247 2イ

請文　3 249 3イ 250 3イ 251 3イ
戒文　2 255 2ロ 256 2イ
海道下　4 258 1イ 258 1ハ 258 1ハ
260 1ハ
千手前　1 262 1イ
横笛　1 268 3ハ
高野巻　1 272 6ロ
維盛出家　4 273 1イ 274 1ロ (275) 2ハ
277 1イ
熊野参詣　3 278 1イ 278 1イ 280 1イ
維盛入水　3 281 1ハ (281) 2チ 281 1イ
三日平氏　3 285 5イ 286 1イ 289 7イ
藤戸　2 (291) 1ヘ 292 1イ
(巻第十一)
逆櫓　1 303 1イ
嗣信最期　1 315 5ロ
志度合戦　1 (325) 7ヘ
鶏合壇浦合戦　1 (330) 7リ
内侍所都入　1 344 1イ
剣　1 346 6ロ
一門大路渡　1 (353) 3チ
副将被斬　2 361 5イ 362 5ロ
大臣殿被斬　3 370 5イ 370 5イ 369 1イ
重衡被斬　2 378 3イ 378 2イ
(巻第十二)

紺掻之沙汰　2 382 3イ 382 2イ
平大納言被流　2 383 4イ 383 4ロ
土佐房被斬　1 (387) 3ヌ
判官都落　2 391 1ロ 392 1ハ
六代　5 398 3イ 396 4イ (399) 3ワ
(402) 3ワ 403 4イ
泊瀬六代　1 407 3イ
六代被斬　1 (413) 1ヌ
(灌頂巻)
女院出家　4 426 1ハ 426 1ハ 426 1ニ
426 1ホ
大原入　1 428 1ハ
大原御幸　2 429 1ハ 433 1イ
六道之沙汰　1 436 1イ
女院死去　1 442 2イ
計　159

② 場面による分類

1 零落（流寓、望郷、懐古、不当な扱い）……67
2 信仰の世界（後世をとむらう、出家、神仏を讃える）…23
3 恩愛のさま（夫婦、親子の関係）……27
4 別離……15
5 死……13
6 故事の説明……6
7 合戦……7

③ 主体の心情による分類

イ 同情、共感……63
ロ 憐憫……25
ハ 悲哀、感慨……28
ハ 情緒、風情……4
ホ 愛情……3
ヘ 遺憾……6
ト 危惧……3
ヌ 自覚……8
リ いかり……3
ヌ 軽い嘆息……7
ル 讃嘆……5
ヲ 驚き……1
ワ 願望、依頼……2